

序

花崎育代先生は、二〇二六年三月をもってご定年を迎えられます。立命館大学人文学会は、先生の積年のご功績を称えるとともに、その学恩に深い感謝の意を表するため、ここにご退職を記念する論集を編み、先生に謹呈させて頂くことにしました。

花崎育代先生は一九八三年三月に日本女子大学文学部国文学科をご卒業され、一九八五年三月に同大学大学院文学研究科博士前期課程をご修了されました。その後、一九八五年四月から学習院女子中高等科教諭としてご勤務され、一九九三年四月から湘南短期大学専任講師、一九九九年四月からは同短期大学助教授に就かれました。そして二〇〇四年三月に日本女子大学で博士（文学）を取得され、立命館大学には二〇〇六年四月に文学部教授としてご着任されました。本学ご着任から二〇年間の長きにわたり、本学の研究・教学を一貫して牽引してこられました。

花崎先生は、大岡昇平の研究において第一人者であり続けてこられました。双文社より二〇〇三年一〇月に刊行されました『大岡昇平研究』は、先生の博士論文をもとにされた素晴らしいご業績であり、同書は二〇〇四年三月に第一二回やまなし文学賞（研究・評論部門）を受賞しています。本書は全一二章で構成され、大岡の主要作品である『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』『酸素』『ハムレット日記』『天誅組』『ミンドロ島ふたたび』等が論じられています。大岡の戦争体験から生じた「恥」「恐怖」「情念」などのテーマや倫理的葛藤等について綿密な考察が加えられたものとして、大岡昇平研究において必ず参照されるべき重要文献とされています。

もちろん大岡昇平の研究にとどまらず、花崎先生は、三島由紀夫や太宰治の研究をはじめ日本近代文学研究の第一線で活躍されてこられました。それゆえに日本近代文学会運営委員・評議員・編集委員や昭和文学会幹事・会務委員・編集委員、日本文学協会委員等を歴任されてこられました。二〇〇五年四月からは公益財団法人日本近代文学館図書資料委員に就かれ、二〇二一年四月からは同館運営審議会委員もお務めになられています。

また花崎先生は、学部生や大学院生に対し、いつも適切かつ丁寧にご指導をくださっており、同僚教員からは厚い信頼を集め、何より学部生や大学院生からも慕われておられます。学域・専攻における諸業務をはじめとして教学運営や組織運営の役割も担われてこれ、研究のみならず、教育や大学組織の運営においても長年にわたり多大なご尽力を重ねてこられました。

日本文学研究学域は、本学部が文学部として存立していくための学術的基盤を形成する学域の一つです。先生には二〇二六年四月

からも名誉教授として、今後とも、立命館大学、文学部、文学研究科へのご助言・ご指導を賜ることができれば幸甚に存じます。

二〇二六年三月

立命館大学人文学会会長・文学部長・文学研究科長

遠 藤 英 樹